

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

長野県の高校山岳部顧問の現状について(センターの調査まとまる)

昨年度、山岳総合センターの今滝郁夫氏が長野県内の山岳部全校の顧問対象に行ったアンケート調査の結果がまとまり、このほど所報で発表した。これについては、センターのHP <http://www.sangakusogocenter.com/chousa/docs/2016highschool.pdf> で見ることもできるので、ぜひ参考にさせていただきたい。ここではそのさわりを紹介したい。詳細のアンケート結果は極めて興味深い内容なので、今週県内各校に郵送される「山岳総合センターの所報」またはHPでご一読いただきたい。全国でも参考になる内容かと思うので、県外の皆さんもぜひHPでご覧ください。

なぜこのような調査を行ったかについて今滝氏は「日本百名山ブームからの中老年登山の高まりに引き続いて、比較的若い世代が登山を行うようになってきている。その流れは高校生にも及んできており、長野県内の一部の高校では山岳部員が増加傾向にある。ただ、高校山岳部の数は近年減少傾向にあり、新しい顧問が育ちにくい状況になってきている。春の県大会や秋の新人大会の折には、顧問体制が今後も維持できるかどうかの危惧の声も聞かれる。そこで県内の山岳部を持つ高校の割合や、学校毎の顧問体制、部活動を指導する顧問の意識などを調べることで、当センターが高校登山活動の一助となる方向性を探ることとした。」と述べている。

長野県全体の公私立高校数は、104校である。その内、山岳部（あるいは登山を活動に含めているアウトドア部やフィールド活動を行う部活動）のある学校は24校であり、通信高校を除いた普通科・定時制高校では24.5%にあたる。今回のアンケート調査は全高校に複数枚のアンケート用紙を配布し、返送をお願いする方法で実施した。

高校での登山はスポーツとして部活動に位置づけられているが、登山自体は知識・技術・経験が重要なため、顧問の力量が部活動の内容に直結する。また、部活動では生徒と一緒に登山をすることになるので、技術や経験でカバーするとしても、基本的な登山体力は重要である。アンケートからみると顧問の年齢が高い方に大きく偏っている。50代以上の顧問が多いことからみると、登山経験の有無が関係していると思われるが、高校の登山活動を衰退させないためには、若い年代の顧問育成が急務の課題である。この課題への危機意識は、学校現場だけではなく、登山界全体が持つ必要がある。

アンケートで顧問が身に付けたい力として、危機管理能力が最上位にあることは重要である。危機管理の第一歩は登山計画の立案からであるが、近年の登山者の遭難は、登りたい山（ルート）と自分の力量とのズレに一因があるといわれている。高校の登山活動では顧問が、生徒の目標の山と登山で要求される力量を一致させる必要がある。読図への関心の高さも、道迷い遭難の多い現状からは重要である。

登山の医学・生理学や登山ルートの知識、応急処置や固定ロープなどの技術はいずれも危機管理に属するものである。アンケートでは、これらへの関心も高くなっている。生徒の命を預かる精神的負担を悩みに挙げている顧問も4分の1を超えているが、それ故に危機管理への関心が高いのであろう。

それではセンターは、顧問が付けたいと考える登山の知識や技術を提供する場の設定

へどのように関わられるだろうか。方向性としては以下の事が考えられる。① 高体連登山部への研修場所の提供、知識・技術の面でサポート、出前講習等。② 当センターが実施している高校向け講習の内容の充実。③ 顧問が参加しやすい講習会のあり方を探る。・・・紙幅の関係で紹介はここまでにしたい。

以上、今滝さんの許可を得て、さわりの部分を紹介したが、今後の在り方についての方向性を示す貴重な結果だと思う。全顧問のうち、50代60代が全体の70パーセント超という恐るべき現状の中、若い顧問の先生方の悩みやとまどいに応えるべく、退職までの残されたわずかな時間を僕もセンターとも協力しながらできることをしていきたい。高校山岳部の文化を継承するために力のある顧問がいる今が正念場である。

長野県山岳総合センター顧問研修会

13日、14日と1泊2日の日程で山岳総合センターで顧問研修会が開催された。例年はこの週は、センターでは針ノ木雪渓で生徒顧問対象の高校登山研修会が行われているが、今年顧問のみの研修会となった。その理由は前々号でもご紹介した通り、栃木の雪崩事故が少なからず影響している。そもそも我々高校山岳部顧問とはどうあるべきか？生徒を引率するとはどういうことか？改めて考えさせられる栃木の雪崩事故であった。しかし、事故とは別に、前項でも紹介したように高校山岳部の指導をすることのできる顧問の養成についてセンターとしてもどのようなことができるかを探っていたことももう一つの大きな要因である。

今回、この研修会に集まったのは、延べ17名。同じく顧問研修の必要性を感じているということで、新潟県からも視察させてほしいということで3名の参加があった。僕自身は、14日所用のため初日のみの参加であったが、その概要を紹介したい。

今年初めて山岳部顧問になった先生も3名、年数を重ねた先生、久しぶりに顧問に復活した先生など、集まったメンバーの経験も年齢も多彩。最初に今年からセンターの所長になった今滝郁夫氏（元大町北高教諭）より、互いにもっているものを出し合って有意義な研修会にしてもらいたいという話があった。午前中は今滝さんの講義が2本。リーダー論とリスクマネジメント論。いずれも前項で紹介したセンターアンケート調査でニーズが高かった項目である。生徒を山につれていくにあたっての判断力をどう鍛えていくか、リーダーとして何が必要かについて具体的な話も織り交ぜながらの話は、経験者であると否とを問わず有意義だった。2講目のリスクマネジメントについては、ある遭難事例をケーススタディとして参加者が意見を出し合いながら、その事故が起こらないためにどうすればよかったのかを考えた。

午後は実技を行い、最初に危急時対応技術として、足首のテーピング、背負い搬送と松葉づえ作りを実習。簡易なテーピングによる固定で予防もできることを実際に体感。背負い搬送では、カップとザックをつかった方法、ストックとザックを使った方法、ハーネスを使った方法など様々な方法を試してみた。それぞれの知見を出し合って有効な方法を検討した。写真はストックを使った松葉づえの例である。

さらには、危険箇所を通過するためのフィックスドロープの技術としての、簡易ハーネスの作り方やロープの結び方などを研修した。



ストックを使った松葉づえ